

首都大学東京×スクラム釜石
釜石ラグビー2019
応援プロジェクト

公式ボランティアプログラム
NO-SIDE
「ロールトレーニング」
&
釜石市フィールドワーク

2019/07/20-21



ロールトレーニング & フィールドワーク

7月20日（土）・21日（日）の2日間、ラグビーワールドカップ2019日本大会（以下、RWC2019）の岩手県・釜石市開催に向けて、本学の「釜石ラグビー2019応援プロジェクト」に所属する学生4名と職員2名が岩手県盛岡市や釜石市を訪れました。1日目は、RWC2019公式ボランティアプログラム「NO-SIDE」のロールトレーニングを受講、2日目は、大会本番に向けて、釜石市でのフィールドワークを行い、東日本大震災による被害の実情や復興に向けた様々な取組について学びました。

さらに、今回は、NPO法人「いわてGINGA-NET」を通じて、岩手県立大学や盛岡医療福祉専門学校との学生と交流しました。

1日目は、それぞれの取組を発表し合う交流会を実施、2日目は合同でフィールドワークをしながら、釜石市出身の学生に震災当時の様子等を教えていただきました。

・ロールトレーニング



ロールトレーニング受付にて

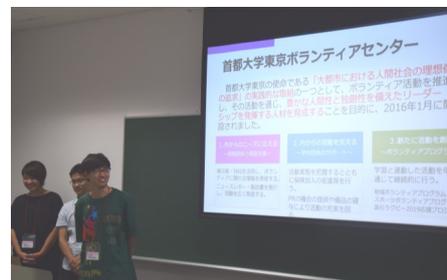
7月20日（土）、盛岡地域交流センターMALIOS（マリオス）で行われたRWC公式ボランティアプログラム「NO-SIDE」のロールトレーニングを受講しました。

ロールトレーニングでは、大会本番に向けて、大会運営に関わる全員が目指すゴールを改めて確認したり、役割ごとに活動内容やケースシ

ナリオ等について学んだりしました。

大会本番、首都大生は「会場内観客サービス」という役割を担いますが、今回のロールトレーニングでは実際の活動のイメージがもてたり、一緒に活動する方々と知り合うことができたりと、本番に向けてより一層モチベーションを高めることができました。

・岩手県内の学生との情報交換会



ロールトレーニング終了後は、岩手県立大学アイーナキャンパスに移動し、「首都大学東京×いわてSVN 学生情報交換会」を実施し、岩手県立大学と盛岡医療福祉専門学校の学生と交流しました。

最初に、本学の「釜石ラグビー2019応援プロジェクト」の学生が、ラグビーを通じた復興支援として自分たちが取り組んできたことを発表しました。続いて、岩手県立大学の「風土熟人R」「復興girls&boys*」「学生ボランティアセンター」「KIPU*Labo」、盛岡医療福祉専門学校の学生から、日頃行なっているボランティア活動についての発表をお聞きました。

岩手県の学生の地域に密着した様々な活動から、地元への強い愛着を感じるとともに、災害時だけではなく、平時からの顔の見える関係をつくることの大切さを学ぶことができました。岩手県の学生からは、「県外の学生の岩手県への思いを知り、活動を知ったことで、県内のことや自分たちの活動を見つめ直すことができた」といった声をいただきました。

お互いに刺激を受け、自分たちの活動を振り返ったり、今後の取組について考えることができた充実した時間となりました。



交流した学生たちとの集合写真

・岩手県釜石市フィールドワーク

7月21日（日）は、釜石市でのフィールドワークを実施し、前日に交流した岩手県立大学及び盛岡医療福祉専門学校の学生と釜石市内の様々な場所をまわりながら、東日本大震災からの復興の現状について学びました。

盛岡市から釜石市へ向かう道中の車内では、釜石市出身で岩手県立大学に通う学生による「釜石クイズ」が行われました。釜石の偉人「大島高任」や「鉄と魚のまち」に関する問題など、これまで知らなかった釜石の歴史等を学ぶことができました。



バス車内で開催！釜石出身学生による「釜石クイズ」

いのちをつなぐ未来館

釜石市に到着し、まず訪れたのは、三陸鉄道リアス線「鶴住居駅」前にある「いのちをつなぐ未来館」です。同施設は、津波伝承と防災学習の拠点として、2019年3月にオープンしました。

今回は、釜石東中学校の3年生だった時に被災し、津波避難を経験された同施設職員の菊池のどかさんから、震災当時の鶴住居地区の状況や、震災以前から取り組んでいた津波防災教育、釜石市の復興のあゆみ等についてのお話をお聞きました。

RWC2019の会場である「釜石鶴住居復興スタジアム」が建設された場所は、かつて釜石東中学校と鶴住居小学校があった場所です。菊池さんをはじめ、同校の小中学生の主体的な避難行動により多くの命が救われた場所でもあります。同時に、多くの命が失われた場所でもあります。今までに感じたことのない揺れ、迫りくる津波からの避難を経験した菊池さんの話からは、悲惨な当時の様子や必死に生きようとした釜石の方々の姿を想像することができました。

「釜石の奇跡」という言葉がメディア等でよく使われていますが、小中学生の避難は、決して偶然の奇跡ではなく、過去の教訓を生かして地道に続けてきた防災教育を通して、自分たちで考え、判断できるチカラを身に付けていたからこそ結果だということが分かりました。

また、「奇跡」と呼ばれる出来事の裏に隠れた防災センターでの「悲劇」があったり、まちづくりをしていくうえで、震災遺構化をめぐる様々な議論があったりする等、報道されていない実情を知り、改めて釜石の方々がRWC2019に期待するもの大きさを感じました。

最後に、菊池さんから、「大学はいろいろな地域出身の方が集まっていると思いますが、今いる街のことを知ってほしい。普段から街の人と仲良くなってほしい」というメッセージをいただきました。釜石市が特別な場所なのではなく、災害はどこでも起こり得るものです。だからこそ、私たちも自分の地域で釜石市の様々な教訓を生かしていくことが大切なのだと思います。



震災の被害について聞く学生の様子

釜石鶴住居復興スタジアム

RWC2019の会場であり、今大会唯一の新設スタジアムである「釜石鶴住居復興スタジアム」では、RWC2019推進本部の職員の方から、スタジアムの特徴等を伺いました。

スタジアム建設においては、特に、①地元森林資源のフル活用、②万が一への備え、③自然との調和、といった点を重視されたそうです。

自然災害への対応として、耐震性貯水槽や避難道等の取組についてもご説明いただき、スタジアムの魅力を再確認することができました。

また、昨年の「8.19 釜石鶴住居復興スタジアムオープニングDAY」にボランティアとして参加した学生は、約1万席の仮設スタンドが新たに設置され、大会本番仕様に様変わりしたスタジアムの様子に感動していました。



釜石鶴住居復興スタジアムのスタンドにて

根浜海岸・宝来館

美しい根浜海岸の目の前にある宿「宝来館」では、同館スタッフの廣田一樹さんから、当時の避難の様子等をお聞きました。

海の目の前に建つ宝来館には、地震直後に激しい津波が襲ったそうです。宝来館にいた方々は、裏手の避難路を必死に登り、津波から逃れたとのことでした。今回は、震災時に使用した避難路にも登らせていただき、津波から逃れた方々が実際に待機していた場所に行きました。一見、木が生い茂る森の中といった場所ですが、寒い中、この場所から津波の様子を見ていることしかできなかった状況を考えると、過酷な状況だったことが分かります。

この避難路は、地元の有志の方を中心に現在も整備されているそうです。根浜海岸が8年ぶりに海開きし、活気が戻ってきた嬉しい状況もあり、廣田さんからは未来への夢が詰まった様々な取組についてもお聞きすることができ、未来に向けたパワーを感じました。



根浜地区の住宅再建の様子について話す廣田さん

釜石大観音

その後は、釜石湾を一望する鎌崎半島に立つ「釜石大観音」へ。職員の佐々木さんにご案内いただき、海を眺めながら海岸防潮堤についてや、魚を抱いて立つ珍しい「魚籃（ぎょうらん）観音」についてのお話を伺いました。

さらに、大観音の胎内に入り、展望台に上がり、釜石市内の様子や目の前に広がる釜石湾を眺めました。多くの命を奪った津波の様子が想像できないほど、今はとても穏やかで美しい海でした。



海と空を望む高台に立つ「釜石大観音」

桑畑書店

最後に、釜石中心市街地に建設された大町復興住宅にある「桑畑書店」に伺いました。釜石で知らない人はいないと言われる桑畑書店ですが、お店の店主である桑畑真一さんは、なんと！首都大学東京（旧 東京都立大学）のOBで学生たちの大先輩です。桑畑さんからは、震災後の店舗再建までのご苦労やご自身のお店への思いなどをお聞きました。

また、新日鐵釜石ラグビー部V7時代には、新日鐵まで本を配達されていた関係で選手の方とも交流があったそうで、当時のお話もお聞きし、釜石の人たちの生活にラグビーが身近に溶け込んでいることを感じることができました。

後輩たちへのメッセージとして、大学で学んだことは今の書店経営や考え方にも活かしていることや、「RWCのボランティア頑張ってください」という言葉もいただきました。



釜石市民なら誰もが知る「桑畑書店」

・フィールドワークを終えて

盛りだくさんなフィールドワークでしたが、今回のフィールドワークでは、釜石出身の学生、内陸部出身の学生など、岩手県の学生と一緒にまわり、近い距離で話すことができたことに大きな意味があったと感じています。そして、復興に向けて取り組む同世代の若い人たちのパワーを感じることができました。

私たちが見て・聞いて・感じた釜石は、まだほんの少しだと思います。しかし、少しでも釜石の人たちに出会い、地域を知ることができ、今回のボランティアは、単なるイベントボランティアではなく、ラグビーを通して釜石とともに歩むボランティアなのではないかと感じました。これからも少しでも釜石を盛り上げ、自分たちの地域のことも見つめ直す取組ができればと思います。

この度のフィールドワークで貴重なお話をお聞かせいただきました皆さま、案内をしてくださったり、岩手の魅力を教えてくださった岩手県の大學生の皆さま、そして、今回のツアーのコーディネートしてくださった「いわてGINGA-NET」の皆さま、本当にありがとうございました。